茅ヶ崎の文化景観を育む会第2回シンポジウム

萬鐵五郎が描いた茅ヶ崎

海岸風景 茅ヶ崎市美術館蔵

海岸小品

捕れた鯵に、
まっ黒い人だかり、
うじゃうじゃと、
動く。
ザ、ザ、ザ、ザア、
これは波の音。

えらそうな顔して、
エグラア、エグラア、
エグラア、
三十八貫ア。
三十八貫ア、サアカッタエグラア、
三十九貫ア。

あの箱一つで、
三円九十銭かな、
1ぴきエクラで売って、と、
エクラもうかるかな、
と考えて見たが、
鯵の数がわからなかった。

東に向いて、
アアあれが江の島ですか、
そうですよ、
浜づたえに行けますよ。
行こうかな、
大変でしょう。

汽車の時間は五時二十と、
二分だったかな。
砂山に葭の垣根は、
何んでしょう、
あの中に松の苗を、
植えてあるんですよ。

松がそだつと、
家を建てます。
あの洋館は、
はっきりしてますねえ。
赤や黒白で、
塗ってあるからでしょう。

（「中央美術」大正一十五年八月号）

シコの大漁　平塚市美術館

プログラム

1，開会のご挨拶　　茅ヶ崎の文化景観を育む会･代表　山口洋一郎
2，ＤＶＤ映写　　（制作 茅ヶ崎市・J-COM Broadband 湘南）
　　茅ヶ崎市広報番組「萬 鉄五郎と茅ヶ崎」
3，シンポジウム１　　茅ヶ崎以前の萬鐵五郎とその画業

（５分間休憩）

4，画像映写
　　「萬の絵画にみる茅ヶ崎風景―油絵・水彩・スケッチ・南画ほか―」
5，シンポジウム２　　茅ヶ崎時代の萬鐵五郎とその画業
6，総括　　関東学院大学・教授　　水沼淑子
7，閉会の辞　　茅ヶ崎商工会議所・会頭　田中賢三

パネリスト

青木茂　（美術評論家・前町田市立国際版画美術館館長）

1932年生まれ。東京芸術大学を振り出しに、美術館学芸員、美術館長、大学教授を歴任。洋画家・高橋由一をはじめとする明治美術研究の大御所。著書に『高橋由一油画史料』（中央公論美術出版社刊）ほか多数がある。「書痴」を自認し、昨年は『書痴、戦時下の美術書を読む』（平凡社刊）を上梓。

土方明司（平塚市美術館学芸員・学芸担当長）

生年不詳。練馬区立美術館学芸員をへて現職。日本の近・現代の美術家や美術の動向にかんして深い造詣を有し、「三岸節子」展ほか多数の展覧会を企画。東京国立近代美術館で3月30日から始まる「生誕100年　鑁光」展では5月12日（土）に「鑁光と池袋モンパルナス」と題する講演をおこなう予定。

平澤広　（萬鉄五郎記念美術館学芸員）

生年不詳。1984年5月に開館した萬鉄五郎記念美術館で萬鉄五郎はもとより、日本近・現代の画家や岩手県土沢周辺で活躍した画家たちの研究に従事。一昨年からは地元の土沢で＜街かど美術館　アート@つちざわ（土澤）＞を企画・開催し、地域に密着した新たな美術活動として注目されている。

長門佐季（神奈川県立近代美術館学芸員）

生年不詳。西洋の近・現代美術史を専攻し、近年は日本の近・現代美術と西洋のそれとの関連にも興味の幅を広げ、気鋭の研究者として注目される。神奈川近美で開催された多数の展覧会の企画・運営に従事。共著に『世界の巨匠マグリット』（岩波書店）、『フランス美術基本用語』（大修館書店）などがある。

文責・浅井和春

コーディネーター　　浅井和春（茅ヶ崎市美術館館長）
司会　　山口佳子（茅ヶ崎市生涯学習推進委員会委員）

萬　鐵五郎年譜

幼少時代　1885 ～ 1903

1885(明治 18)年　11 月、岩手県東和賀郡十二ヶ村（現、花巻市東和町土沢）に、父八十次郎、母ナカの長男として生まれる。萬の本家は屋号を「八丁」と称し、釜石と花巻の中間の地土沢で農海産物問屋を営む大地主として知られていた。母はその長女で、父八十次郎は婿養子であった。鐵五郎は、2年後に生まれた従弟昌一郎とともに曾祖父長兵衛や祖父長次郎に溺愛され、本家で育てられている。

1892(明治 25)年　7歳　4月、土沢尋常小学校に入学。この頃の鐵五郎は絵を好み、めったに戸外では遊ばない内気な子供であったという。

1893(明治 26)年　8歳　6月、母ナカ死去（享年 27 ）。

1894(明治 27)年　9歳　（8月、日清戦争始まる。）

1896(明治 29)年　11 歳　3月、土沢尋常小学校を卒業。
4月、土沢高等小学校に入学。
（6月、白馬会結成。7月、東京美術学校に西洋画科設置。）

1898(明治 31)年　13 歳　（7月、日本美術院創立。）

1899(明治 32)年　14 歳　この頃、日本画を独習（同年の年記のある「應翠先生筆　山水畫譜萬寫」と表紙書した粉本模写が残存）。また落款作りにも熱中、当時の自刻印多数が残される。
11 月、和賀郡教育品展覧会に山水画（？）を出品。

1900(明治 33)年　15 歳　3月、土沢高等小学校を首席で卒業。中学への進学は祖父長次郎に許されず断念。
彼は中学講義録などを独習、特に英語は慶応義塾普通部出身の菊池一郎について学んだ。
（4月、パリ万国博覧会開催。）

1901(明治 34)年　16 歳　この頃、大下藤次郎著『水彩画之栞』を購読、水彩画を始める。また、従弟昌一郎とともに写真に熱中、土沢で初めて購入されたという自転車を乗り回す。

1902(明治 35)年　17 歳　4月、祖父長次郎死去（享年 62 ）。祖父の死去にともない、鐵五郎と昌一郎は進学への志を強くする。
（3月、『美術新報』創刊。同誌8月号でミレーを紹介。）

東京時代　1903 ～ 1914

1903(明治 36)年　18 歳　3月、鐵五郎は進学のため上京。同月末、私立神田中学校3年に編入。4月、昌一郎も鐵五郎の後を追って上京し、神田中学校2年への編入が認められる。
9月、神田中学校の 12 月廃校にともない、私立郁文館（現・郁文館高等学校）の3年と2年に編入。しかし、 10 月には私立早稲田中学校（現・早稲田高等学校） 3年に編入学している。早稲田中学時代の鐵五郎は、淡翠会という絵画同好会に加入して写生会などに参加、たびたび水彩画の展

覧会を行う。
秋、鐵五郎はヨーロッパから帰国した大下藤次郎を青梅に訪ね、作品の批評を受ける。

1904(明治 37)年 19 歳　この頃、伯母タダの勧めで日暮里（後に谷中へ移転）の禅道場両忘庵（臨済宗円覚寺派の僧、入沢譲四郎釈輟翁宗活禅師が営む）に昌一郎とともに参禅。「雲樵居士」（初期の日本画に認められる落款の「雲樵」はこれによる）、と安名を授けられる。ここで後に京都・妙心寺管長となる後藤瑞巌や、同じく衆議院議長となる田子一民、日本赤十字産院長となる久慈直太郎、盛岡市長となる堀合由己、東京高等農林学校長となる松岡忠一、婦人運動家の平塚らいてう、茅ヶ崎時代のパトロン的存在となる埼玉行田の富豪大澤久三らを知る。
（２月、日露戦争始まる。翌年６月、日露講和条約締結。）

1905(明治 38)年 20 歳　この頃から、本郷区菊坂町の白馬会第二洋画研究所（通称菊坂研究所）に通い始める。
（７月、『みづゑ』創刊。 10 月、フランスでサロン・ドートンヌ出品のマチスらの作品に〈フォーヴ〉の名称。）

－アメリカに渡航－

1906(明治 39)年 21 歳　３月、早稲田中学を卒業。
４月、早稲田大学高等予科に入学手続きを取る。
５月、両忘会宗活禅師による北米布教計画に加わり（従兄弟の昌一郎、大澤久三らも参加）、アメリカへ出発。サンフランシスコ到着後、対岸バークレーの米人家庭にボーイとして住み込む。
７月、早稲田大学高等予科への退学届提出を伯母タダに依頼。
９月、アメリカ東部の美術学校に入学する計画を立てる。この頃《アメリカ風景》（ No.2 ）を制作。
宗活禅師らの伝道計画は、同年４月 18 日のサンフランシスコ大地震の影響でカリフォルニア地方一帯は物価高騰が続き、失敗に終わる。
11 月、アメリカでの絵画勉強を断念して帰国。昌一郎も翌年帰国して早稲田中学に復学。彼はその後、慶応義塾大学理財科を卒業して土沢に戻り、地方財界の中心をになうとともに、鐵五郎の物心両面での支えとなった。
12 月、再び菊坂研究所に通い始める。
（ 10 月、第１回文展。）

－東京美術学校時代－

1907(明治 40)年 22 歳　４月、東京美術学校（現・東京藝術大学）西洋画科予備科に入学。
９月、東京美術学校西洋画科本科に首位で合格。在学中、しばしば級長を務める反面、奇行も伝えられる。
10月、第11回白馬会展に出品（以後、1910年の第13回展まで出品）。

1908(明治 41)年 23 歳　（11月、フランスでブラックの個展開催。〈キュヴィスム〉の名称起こる。）

1909(明治 42)年 24 歳　春、浜田よ志（淑子は通称）と結婚。小石川宮下町に新居を構える。
（１月、『スバル』創刊。２月、イタリアでマリネッティ『未来派宣言』発表。）

1910(明治 43)年 25 歳　2月16日、長女フミ(後に登美と改名、とみ子、登美子は通称)が生まれる。
（４月、『白樺』創刊。この年、大逆事件。韓国併合。）

－アブサント会からフュウザン会へ－

1911(明治 44)年 26 歳

5月、アブサント同人小品展に出品。同展には、2カ月前に夭折した青木繁の《自画像》《黄泉比良坂》も展示。「アブサント」は、前年末に、東京美術学校在校生による文芸同好会として日本画科の広島新太郎（晃甫）、川路誠（柳虹）らにより結成され、『アブサント小集』を発行。参加者には、同級生の平井為成、山下鐵之輔もいた。

（3月、白馬会解散。9月、『青鞜』創刊。 11 月、石井柏亭が東京朝日新聞に立体派を紹介。 12 月、カンディンスキーらミュンヘンで「青騎士」展開催。この年、ロンドンでハインド『後期印象派』刊行〈C.L. Hind, The Post-Impressionists〉。）

3月、東京美術学校西洋画科本科卒業。卒業制作は《自画像》（ No.7 ）《裸体美人》（ No.8 ）。同制作の評点は 72 点で、本科卒業生 19 名中 16 番。引き続き1年間ほど研究科に在籍。

5月、第1回雑草会展に出品。同会は、太平洋画会研究出身の川上涼花、川村信雄、三並花弟らが主体となり、アブサント会同人の萬、平井為成、白馬会洋画研究所（葵橋研究所）にいた岸田劉生（ただし同展に出品せず）らが参加。

6月、『岩手毎日新聞』に挿画を掲載（同紙への挿画寄稿は以後、大正8年まで断続的に続けられた）。

9月、斎藤與里、岸田劉生、清宮彬らの「ヒュウザン会」（後に「フュウザン会」と表記）に参加。同会には高村光太郎、埴原桑喜代 （久和代）、木村荘八、小島善太郎、山下鐵之輔、鈴木金平、小林徳三郎、平井為成、バーナード・リーチ、岡本帰一らがいた。

10月、第1回ヒュウザン会展に《静物》《女の顔（ボアの女）》ほか出品。

この頃、生活費捻出のため郷里から木炭を取り寄せて販売、浅草の活動写真館の看板なども描く。また夏頃には、池之端外国館で開かれた拓殖博覧会の台湾館の大壁画を、久米桂一郎と和田英作の監修で近藤浩一路、田中良らと制作。冬にも浅草六区で、御厨純一らとともに青山熊治を中心とする海底旅行のマリオラマ制作に従事。さらに、雑誌『文章世界』『太陽』に挿画を寄稿。この年、《田園風景》（No.10）、《ガス灯》（No.14）制作。また、《雲のある自画像》（ No.9 ）もこの頃か。

（11月、『白樺』ゴオホ特集号。『ヒュウザン』創刊。12月、石井柏亭「フォービイズムとアンチ・ナチュラリズム」『早稲田文学』12月号）

1913(大正2)年 28 歳

1月1日、『岩手毎日新聞』に初の画論「友人の批評に答える手紙」を寄稿。この頃、『読売新聞』や文芸雑誌『曠野』（小田嶋孤舟が発行）に挿画を寄稿。

3月、短期現役志願兵として北海道旭川の第7師団に入営。輜重兵として第7大隊第2中隊に配属され、3カ月間務める （ここで、師団のロシア語教官であった若きロシア文学者の米川正夫を知る）。

同月、第2回フュウザン会展に《日傘の裸婦》出品。

5月、フュウザン会解散。

7月、第7師団除隊。その後約1カ月間、各地をスケッチして東京に戻る。

9月、島村砲月・松井須磨子らによって結成された芸術座第1回公演のメーテルリンク作「モンナ・ヴァンナ」三幕の舞台装置や電車用ポスターなどを製作。

（2月、木下杢太郎「洋画に於ける非自然主義的傾向」〈上・中・下〉『美術新報』第 12 巻4号ー8号－ピカソ、カンジンスキー、マルクらを紹介。9月、岩手軽便鉄道会社の花巻・土沢間が開通〈現、 JR 東日本釜石線〉。萬本家は同会社の出資者の一人。）

土 沢 時 代　　1914 ～ 1919

1914(大正3)年 29 歳　　2月、土沢に一時帰省。
3月、土沢尋常高等小学校を会場に、会費1円で絹本画、画仙半紙画など 70 点を抽籤により配付する画会を開く。同月下旬までに東京に戻る。
6月、長男博輔が誕生。
9月、家族をともない郷里土沢に帰る。萬の家族は、本家「八丁」と道路を挟んだ筋向いの倉庫を改造して住む。萬は隣接した木造西洋館にアトリエを構える一方、電灯会社の代理店も営むが、店はよ志夫人にまかせて制作に専念。
（4月、斎藤佳三「表現派と立方派と未来派」『美術新報』第 13 巻9号。この年、第一次世界大戦始まる。）

1915(大正4)年 30 歳　　9月、東京または盛岡で個展の開催を計画。同時に作品頒布の画会　（盛岡市在住の弁護士堀合由己－両忘庵での知己－が中心となって企画）準備のため上京する。
10 月、画会会員に景品として配付予定の作品を長原孝太郎、斎藤與里ら十数名の画家から寄贈され、土沢に帰る。
11 月、『岩手毎日新聞』に「萬鐵五郎画会」の広告が掲載される。この画会は肖像画、風景画、掛軸（山水）の三部に分かれ、会費 10 円（肖像画、風景画）、もしくは5円（掛軸）を 10 カ月間分納（肖像画、風景画の部は1円ずつ、掛軸の部は 50 銭ずつ分納）　することで満期時に作品を頒つというもの。萬は、作品が完成した時点で盛岡で個展を開催し、その後それらを頒布する計画であったが、制作の遅延などで結局、個展は行われなかった。この頃《手袋のある静物》（No.15）　を制作。
（ 12 月、荻原直正訳「カンジンスキーの芸術」『中央美術』第2巻1号。同月、斎藤與里「自然と南画」『美術新報』第 15 巻2号。）

－再 び 東 京 へ （ただし、作品のテーマは主に土沢のもの）－

1916(大正5)年 31 歳　　1月、家族とともに再び上京し、小石川宮下町に居住（この後、しばしば転居）。
9月、「十二月色紙会」を興す（この画会は、入会金 50 銭、月々の会費1円で、毎月色紙を1枚ずつ頒布するもので、 20 人ほどの申込みがあった。この年、《風景（塀のみえる風景）》（No.16）制作。
（2月、チューリヒで「ダダ」運動が起こる。6月、木下杢太郎「立体派の絵画」『文章世界』第 11 巻6号。）

1917(大正6)年 32 歳　　4月、前々年に計画した画会の作品が大部分完成、申込者への配付が始まる。
5月、第2回日本美術家協会展に土沢で制作した《パイプのある静物》《雪の景》ほか 27 点を出品（同会は、斎藤與里、斎藤五百枝、川上涼花、川村信雄、恩地孝四郎、硲伊之助、藤井達吉らにより前年4月に結成）。
8月、土沢に一時帰省。
9月、第4回二科展に《もたれて立つ人》を出品。そのキュヴィスム的作風は、未来派風の東郷青児や神原泰の作品などとともに注目される。
同月、第4回院展洋画部に《雪の朝》《夏の真昼》などを出品。
10 月、次女馨子が誕生。
（7月、『中央美術』〈南画研究号〉第3巻7号。 11 月、滄涼子（田中豊三）「所謂南画的新傾向」『国華』330号。この年、ロシアで2月革命、 10 月革命起こる。）

1918(大正7)年 33 歳　　3月頃、盛岡在住の書家で郷土史家の新渡戸仙岳に、日本画の雅号選定を依頼（晩年の文人画に使われる「犂耳窩主」の落款印はこの時の依頼によ

る）。
4月、第5回日本水彩画会展に《風景》《枯木》などを出品。
5月頃、土沢に一時帰省。
9月、第5回院展洋画部に《薬罐と茶道具のある静物》を出品。
夏頃から体調を崩し、神経も衰弱して作品を制作できなくなり、また肺結核に罹っていることも判明する。
11 月、神経衰弱と肺結核の療養に専念するため、資金的な援助を土沢の昌一郎に手紙で依頼する。この頃、《松島屏風》（No.19） 制作。
12 月、治療を受け、体調は徐々に回復に向かう。この年、《丘のみち》（No.18）制作。
（1月、『白樺』第9巻1号〈ロダン追悼号〉。）

茅ヶ崎時代　1919 ～ 1927

1919(大正8)年 34歳　1月、第1回創作版画協会展に出品。
2月、第 16 回太平洋画会展に出品。
3月 14 日、転地療養のため、神奈川県茅ヶ崎で病気療養中の弟泰一のもとに赴く。当時の茅ヶ崎は、結核療養所の南湖院があることで知られていたほか、別荘地としても発展していた。
春頃から長谷川如是閑主宰の総合雑誌『我等』に挿画を寄稿。
9月、家族を呼び寄せ、神奈川県高座郡茅ヶ崎町茅ヶ崎 4275 番地（通称「茅ヶ崎天王山の木村別荘」。現・茅ヶ崎市南湖4丁目5番 20 号）で一緒に生活するようになる。「木村別荘」は元来、医者が使っていた家で、萬はその診療室の板ノ間をアトリエとした。
同月、第6回二科展に出品。林倭衛、東郷青児、鍋井克之とともに二科会会友に推挙される。
（4月、ドイツでグロピウスらがバウハウスを設立。 10 月、帝国美術院第1回展覧会。）

1920(大正 9)年 35歳　3月、「四十年社」（明治 40 年に東京美術学校西洋画科に入学した同級生 14 名からなる）の結成に参加し、第1回展に《少女》《庭の花》出品。
この年、大作の制作を予定していたが、赤痢にかかり中断。

1921(大正 10)年 36歳　春、大澤久三が静養のため茅ヶ崎に滞在。萬は彼のもとをしばしば訪ねて中山高陽などの日本画を鑑賞し、この頃から南画に傾倒する。
2月～5月、第2回風国美術協会展や第8回日本水彩画会展、第4回岩手県芸術品展などに出品。
この頃、《水浴する三人の女》150号の制作に取り掛かる。
10月、第3回帝展に《水浴する三人の女》を搬入するも落選。「当落発表の前夜、友人から入選の報が届けられ、祝電さえきていたが、発表当日になると落選となっていた」というエピソードが残される。この作品は後に萬自身の手で切断されたが、木炭や墨などによる下図数点から作品の原形が推測できる。また、裸婦のポーズが油彩、版画のモティーフとして残存。
（3月、富岡鉄斎を顧問に日本南画院設立、南画ブーム起こる。 11 月、マリネッティ「未来派舞踏の宣言」『明星』第1巻1号。）

1922(大正 11)年 37歳　1月、森田恒友が茅ヶ崎を訪れ、新たに設立される春陽会への参加を勧誘。春陽会は、小杉未醒（放庵）、山本鼎、長谷川昇、倉田白羊、足立源一郎、森田恒友の6名に、梅原龍三郎を加えたメンバーが発起人となり設立。萬は、森田の勧めを受け入れ、岸田劉生、木村荘八、石井鶴三、中川一政、山崎省三らとともに客員として参加(翌年、客員制廃止により会員となる)。
2月、第4回創作版画協会展に《うしろむき》出品。

5月、第9回日本水彩画会展に《桑の若葉》ほかを出品、同会の会員に推薦される。
7月、萬鐵五郎日本画展を開催。この時、画会「鐵人会」を興す　（同会は萬の後援会的性格が強かった）。
この頃、南画の研究を深め、美術雑誌で英文学者・文芸評論家の本間久雄と南画及び明治初期の南画家菅原白龍の芸術について論争する。
9月、岸田劉生宅を訪れ、沈石田と倪元路の作品を預ける。
この年の6月から大正14年9月まで、『早稲田文学』に断続的に挿画を寄稿。

1923(大正 12) 年　38 歳

1月、小林徳三郎とともに円鳥会を結成。同会は、萬が前年の秋頃から結成準備を進めていたもので、参加した画家は児島善三郎、林武、前田寛治、恩地孝四郎、松本弘二など、二科会の若手画家たちで後に一九三〇年協会や独立美術協会の設立に参加した画家が多く、萬の芸術に多少とも影響され、萬が素質を認めた若い画家たちの集団であった。
2月、第 10 回日本水彩画会展に出品。
4月、岩手県出身者を中心とした在京美術家の団体「北斗会」が結成され、会員となる。
同月、三女多津子が誕生。
同月、第1回春陽会展の出品審査に出席。同会は新聞雑誌の美術記者立会いの公開審査を行って話題となる。
5月、第1回春陽会展に《ねて居る人》《冬の日》ほか出品。
6月、第1回円鳥会展に《風景》4点等を出品。
この頃から、原精一、森田勝、鳥海青児らが茅ヶ崎に萬の画室を訪ねる。
この年、《荒れ模様》（No.22）制作。
（9月1日、関東大震災。）

1924(大正 13) 年　39 歳

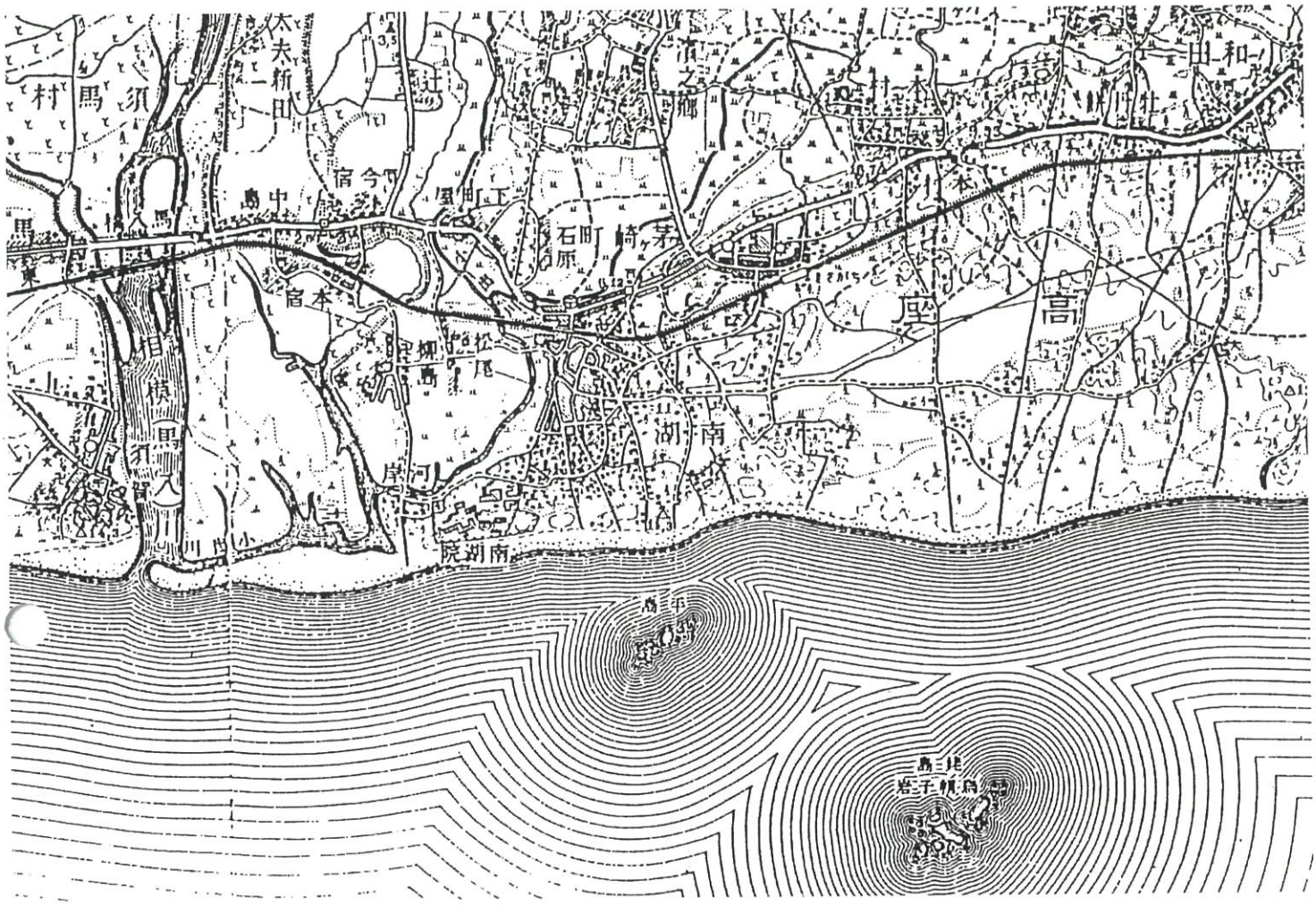
3月、第 11 回日本水彩画会展および第2回春陽会展に出品。
4月、第2回円鳥会展に出品。
5月、萬鐵五郎裸体十題木版画会を興す。
7月、鐵人邦画会を開催。
8月、第1回湘南洋画会展に賛助出品。
10 月、盛岡で萬鐵五郎氏作品展を開催。
11 月、第3回円鳥会展に《少女（校服のとみ子）》（No.21）出品。
12 月、第4回四十年社展に出品。

1925(大正 14) 年　40 歳

2月、第 12 回日本水彩画会展に出品。
3月、第3回春陽会展に《羅布かづく人》《宙腰の人》ほかを出品。
7月、第2回湘南美術会展に出品。
この年の末頃から、長女登美が健康を害し病床につく。この年、《茅ヶ崎風景》（No.33）制作。
（1月、長谷川昇訳「セザンヌの手紙」『アトリエ』2巻1号。7月、村山知義『カンディンスキー』アルス美術叢書4、アルス社。7月、国画創作協会に第二部（西洋画）設立。この年、普通選挙法、治安維持法公布。）
2月、第4回春陽会展に《裸婦（ほお杖の人）》（No.37）ほか出品。
3月、『マロニエ』主催諸家素描水彩展に出品。
5月、聖徳太子奉賛展に出品。
6月、萬鐵五郎・秋田義一・小林徳三郎・虫明柏太・大森桃太郎五人展に出品。
9月、アルス美術叢書の中の一冊として、著書『文晁』がアルス社から刊行される。
同月、第6回四十年社展に《海岸風景》《T子像》ほか出品。
12 月 16 日、前年暮より病床にあった長女登美が膀胱結核のため自宅で死去（享年 16 ）。萬は非常に落胆し、この頃から精神的にかなり疲労する。この年、《海岸風景》（No.40）を制作。

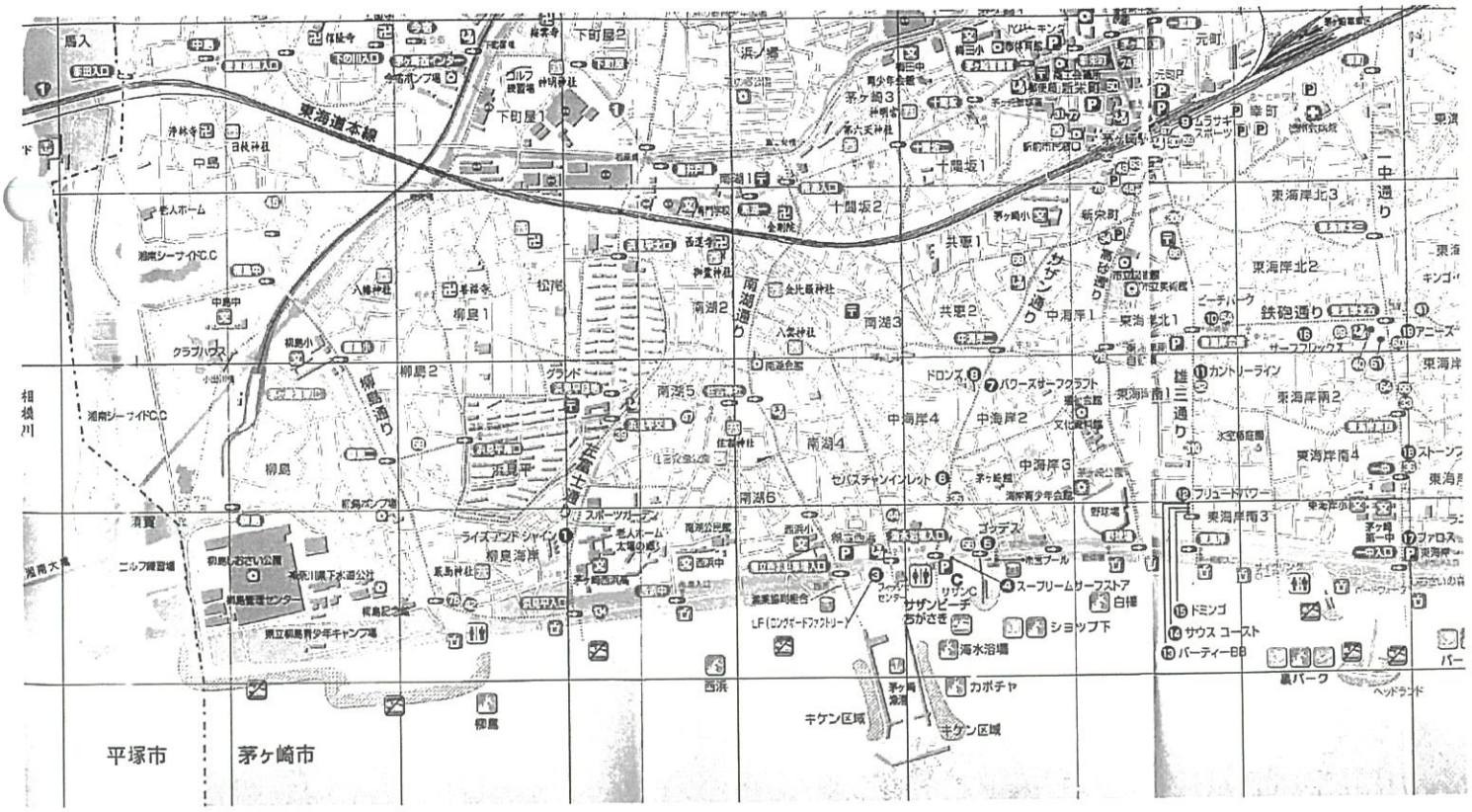
1927(昭和 2) 年	2月、前年 11 月に死去した友人の虫明柏太（享年 34 ）遺作展の発起人となり尽力する。 この頃から、健康がすぐれず床につく。 4月、第5回春陽会展に《水着姿》《静物》ほか出品。 同月末、結核性気管支カタルから肺炎を併発。 5月1日、午前 10 時 30 分、神奈川県高座郡茅ヶ崎 4275 番地の自宅にて死去 （享年 41 ）。 同月7日、東京西品川の日蓮宗妙光寺において葬儀が行われ、同寺の墓所に埋葬される。諡号「法雅院霊鑑居士」。

メ モ



地図１　　藤沢(明治 42 年測図大正 10 年修正測図 5 万分の 1 地形図 大正 11 年・14 年発行)

茅ヶ崎市『地図集 大地が語る歴史　茅ヶ崎市史 現代 7』1994 年発行より



茅ヶ崎風景 個人蔵